



理事会だより (4・10)

- 一、定期総会議案書案につき各部よりの最終説明をうけ確認し総会に備えることになった。
 - 二、秋季大会を七百号記念大会とすることにつき長谷川副会長(事業部長)の実施案を受け意見交換、事業部で検討の上5月理事会で決定することになった。
 - 三、合同句集13集の会計報告(会計部)。寄贈先、新会員勧誘等に希望あれば提供する旨山田委員長より。
 - 四、部会報告 総務部…新年度の会員数は百四十名、新会員の勧誘を要請。広報部…合同句集鑑賞への協力要請。会計部…郵送料改定の入金は順調。
- 第72回定期総会 4月24日出席20名委任状31名にて成立し、事業報告・計画、決算・予算を審議、承認。役員変更につき報告

理事会日程

5／8 6／12 7／10

(毎月第2木曜日 けやき15時より)

「俳句おだわら」10句抄 (692号より)

菅野英余 抄出

十二支をはづれし猫と日向ぼこ
戸車がはずれ子を呼ぶ水仙花
大寒や己が仕草の鈍きこと
拍手のまたもそろはぬ寒さかな
露の臺あやす大地を押し退けて
梅三分咲いて七分の日和かな
地図読めぬをんな集まる探梅行
山笑う畦行く犬の前のめり
初午や禰宜の背筋のうら若し
二月や塊とんとん崩しおり
守屋まち 抄出
十二支をはづれし猫と日向ぼこ
沖波のさながら螺鈿初景色
薄水やラップの切目はがすかに
穏やかに向かう白寿や薄水
静止して墨絵の如き寒の鯉
遠慮する子の生くる世や冬銀河
掘割の忙しき水音春まちか
蛙焼くや水音水に還らざる
初午や禰宜の背筋のうら若し
鴨の池めぐりて水尾のひかる位置

和田恵美子 竹下由里子 門松 鳳文 吉田 康雄 廣田 悦子 森田 久江 伊藤はる子 大沢 年子 新井たか志 岡田 典代 和田恵美子 池田 忠山 石井千代子 松下 俊之 柳川 紀枝 高橋久美子 米山 翠 古屋 徳男 新井たか志 山田 照子

令和6年度事業報告

〈主催及び主管事業〉

- 1) 第77回小田原桜まつり俳句大会 場所 おだわら市民交流センター (UMECO)
4月7日(日) 今回をもって終了
第一部(兼題の部)「桜又は花」「蝶」 投句者163名 569句
第二部 春季雑詠2句 参加者67名 132句
- 2) 令和6年度小田原秋季俳句大会 場所 おだわら市民交流センター (UMECO)
10月6日(日) 11時より受付12時半開会 整理費500円
第一部(兼題の部)作品募集 兼題「案山子」「柿」 投句者162名 206組 512句
第二部 秋季雑詠2句 総互選 参加者54名 小田原市から安藤副市長、大川市議会議長を来賓にお迎えして祝辞を頂く。恒例の寿齢者対象者に記念品(クオカード)を贈呈した。 22名
- 3) 秋の吟行会 吟行地 国府津海岸周辺 11月7日(木) 担当:事業部
当日囃目3句、参加者24名。参加者の自己紹介後総互選、披露は各自で実施した。
- 4) 立春青空句会 令和7年2月4日(月)、場所 小田原城址公園 天守閣広場
小田原観光協会夏刈事務局長並びに当協会の村場会長の挨拶等、セレモニーの後、協会員による短冊吊るし作業に移る。本丸茶屋で会食後、当日囃目2句、予め投句した1句の計3句にて総互選、5句選で 披露は各自、22名にて句会を実施した。
- 5) 第61回小田原梅まつり俳句大会 場所 おだわら市民交流センター (UMECO)
2月9日(日) 11時より受付12時半開会 整理費500円
第一部(兼題の部)作品募集、兼題「梅」「余寒」投句者155名244組 488句
第二部 春季雑詠1句と当日発表の「雲雀」2句にて総互選4句、出席者63名
結社賞13を含めて50位までを表彰

後援事業

- 第46回笛まつり俳句大会(南足柄女性センター) みなみ俳句協会 9月29日(日)
整理費500円
第一部(兼題の部)作品募集 兼題①「笛」又は「蛸」②「水澄む」
第二部当日出題、秋季雑詠と2句 総互選
- 第14回おおいゆめの里俳句大会(大井町立そうわ会館) おほみ俳句協会
令和7年3月8日(土)、
第一部(兼題の部)作品募集 兼題「朧」「堇」 第二部 当日席題「桜」と春季雑詠、
2句総互選

その他の事業

合同句集13集の発行(6年12月)

令和7年度事業計画

〈主催及び主管事業〉

- 1) 秋の吟行会 場所・日時未定 担当 総務部
- 2) 令和7年度小田原秋季俳句大会&協会報700号記念大会(仮称)
場所 おだわら市民交流センター (UMECO)
日時 10月11日(土) 時間等内容未定
- 3) 令和8年2月4日(水) 立春句会 場所 小田原城址公園 天守閣広場
- 4) 令和8年2月8日(日) 第62回小田原梅まつり俳句大会

後援事業

- 第15回おおいゆめの里俳句大会 おほみ俳句協会 3月14日(土) 大井町立そうわ会館

俳句おだわら（4・19メ切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（3・21）

久江報

風が描く画布青空の桜かな

足立 和子

下校児の土筆三本家苞に

川本 育子

桃の花風の奏でるわらべ唄

高橋 小糸

風の音風に揺れたる土筆かな

湯浅 義幸

梅散るは刻のひらひら舞ふごとし

近藤 久江

◆山北（3・27）

由里子報

新聞の匂ひを開く春の雨

和田恵美子

糸遊や有象無象の立ちのぼる

星 一義

「無」の多い般若心経つくしんぼ

石田加津子

添削の朱筆麗はし露の臺

竹下由里子

◆春野（3・16）

きよ志報

散りいそぐ桜遅れる市営バス

伊藤はる子

耳裏にざわめきのある花疲れ

内田知江子

鳥帰る誰のものでもない地球

尾崎 一夫

桜咲きこの世に居ない人ばかり

瀬戸 悠

風光る使はぬ畑に住まぬ家に

二見 和江

浅春のテキストの山語学馬鹿

ミステウレッタ弘美

うららかや陽を浴び風浴び羽音浴び

長谷川きよ志

◆沈丁（4・3）

寶子山報

春眠や携帯アラーム止めてまま

若村 京子

陽春や家族総出の田畑鑿る

柳澤ミサ子

春眠の園児たてよこなめなり

田中 恵一

春眠や吸いこまれそうなアメジスト

河本 純子

花疲れ小田原城が遠く見え

勝木 澄子

春眠やかすかに重き泥パック

菅野 英余

げんげ田や任地へ続く一本道

高井 幸子

花を来て芝居の中の花吹雪

片野 節子

桜まじ茶毘の煙は空に吸われ

峯尾ユキエ

春眠やピューとケトルに起されし

清水美代子

田の脇に大根の花咲き誇る

松下 俊之

フェフェハケと笑ふ女将や花見宿

武居裕美子

花は五分人の歩幅のゆるやかに

森田 久江

春眠のよだれ光りて二度寝かな

川瀬 芳子

廃屋の窓の花瓶に花落ちる

鈴木 陽子

終活ひまの隙の春眠ながながと

寶子山京子

◆青梅（4・9）

幸子報

燕舞ふ土手を散歩の二人づれ

大塚 行人

お囃はやしの近づいて来る里の春

加藤まり子

春うらら急ぐことなき畑仕事

久保寺トミ子

しつぽりと濡れ三寸の甘茶仏

田中 幸子

◆みなみ(3・15)

かほる報

雲雀野の明るき風と四方の山

加藤 富江

人間に聞かす囀り揚げ雲雀

川上 靖子

青き踏む携帯電話オフにして

加藤 健治

平凡に暮し花種蒔いている

市川めぐみ

「どちらまで」小粋な老いの春シヨール

豊田 幸枝

一駅を線路に沿うて青き踏む

斉藤 静

春の野辺田舎の良さに浸りけり

小瀬村信子

青き踏む左右の手には子等の手が

柳川 紀枝

啓蟄や大地は呼吸整える

加藤かほる

◆おほる(4・9)

きよ子報

ちちははの好みし物に花菜漬

松良 榮美

正面の箱根の山や花曇

安池 利枝

桜舞う麻痺のある子の一歩かな

二上 光子

雁風呂や北へ標の竜飛崎

横塚 昌平

菜の花の風が誘いしウォーキング

石井千代子

春の雷分解写真となる大地

小野 菊土

語り継ぐ七つボタンや桜散る

香川 花子

素になれるときを求めて花の下

加藤 春江

幸せの笑顔届けし花菜風

瀬戸とみ子

銀輪を連ねる土手や花菜風

高橋みどり

老境のくらしのリズム茎立菜

中根登美子

菜の丘を少女が駆けて花になる

中村 昌男

涙無くグータッチして卒業す

中津川晴江

桜散る吾の掌に確と生命線

廣田 悦子

ヒヤシンス主なき部屋へ光置く

原 仁子

百千鳥清しき朝始まりぬ

石井きよ子

◆こよろぎ(3・14)

つとむ報

濡れ縁に友のおもたせ桜餅

大澤 紀子

干し物のみなちぎれさう春一番

高杉掘三朗

千本の花のあなたに蔵王堂

植松テル子

黒牛のまなこに映える斑雪

神山つとむ

◆香雨・梅ごち(3・23)

忠山報

轉や卓に揃ひのマグカップ

肥後ちさこ

飼犬に「待て」を教へる日永かな

関戸わよこ

芽吹きたるひとつひとつに日の宿り

門松 鳳文

隅にまで園に日あたる初桜

吉田 百代

さへづりに気づかれぬやう窓を開け

吉田 康雄

小流れのさざれ石へと春日影

陌間みどり

いつせいに日ざし取り込み花こぼし

小澤 純子

鳩と化す鷹の一羽は狩行とも

池田 忠山

◆鷹(4・7)

十五報

紅梅の垂れて小さき庭たのし

青木 孝子

夫の歩の日に異によろし木の芽張る
病む人の口述筆記花明かり
地方紙を敷いて文旦送りさし
本堂へ続く回廊牡丹の芽
水底のきらめく波紋芹を摘む
春休借りしノートの文字まろし
人文字に村人も出て卒業す
辻占の老の眼光街臚
まどかなる楠の樹影や卒業す
朝虹や鳥語あつまる雑木山
芸大の上野キャンパス囀れり
白木蓮に雲切れのなき夕べかな
落味噌や晩酌の父無言なり
たんぽぽの絮や飛び立つ軍用機
啓蟄や平飼ひ鶏の利き蹴爪
せせらぎの底に照る石芹洗ふ
東屋に弁当拡ぐ土筆かな
啓蟄や球音高き草野球
天守より見下ろす町や養花天
遠足やグリコのおまけ見せ合うて
林から鳥声しきり夏隣
若草や墓石に知れる祖先の名

池田 令子
西賀 久實
佐宗 欣二
中田 笑子
山崎美知子
石川 州洋
庄司 下載
瀬戸 りん
高橋久美子
中山智津子
齊藤 桂
芹澤 常子
松岡美和子
深澤 一華
大島美恵子
加藤 幾代
高橋千代子
米山 翠
來田 新子
青山 典仁
大沢 年子
小林 環

東屋に水音さやか花馬酔木
予定表書いて眺むる日永かな
亀鳴くや曾我の誉と言ふ地酒
息一つ足して稿書く日永かな
介護する我も足弱春あられ
蛇飛んで空の青さに消えにけり

◆実のり(4・16)

たか志報

全山の桜吹雪や迷ひ路
丁寧にもやしの根とる春炬燵
校庭の砂塵巻き上げ春疾風
風船を飛ばして未来広げたる
売却の決まる田畑や草若葉

◆零(4・17)

史郎報

生き様は一心不乱チューリップ
表札に仔猫の名前風ひかる
風光り我が心をも澄み渡る
みつを展納得させられ風光る
花あんず産衣の吾子のやわらかし
いぶりがっこ老婦の手皺歴史あり
前へ前へ先へ先へと春がくる
風光る死ぬまで生きる被曝牛

◆草むら(4・20)

重満報

澁谷 明子
下平 美子
鳥海 壮六
古屋 徳男
守屋 まち
村場 十五
荒井ちゑ子
岩本ひさみ
杉本 久子
木村 幸枝
新井たか志
青木たけを
伊藤 道郎
川合 昌子
佐藤 正子
中村 裕子
本多登美子
岡本 史郎

春鱖釣引きずる糸に魚信聴く
土下座して蟻と語らん絶景
連翹や宿す枝先の磁力線

◆無所属

石井 秀稀
佃 悦夫
佐々木重満

老幹を折りふすお濠桜雨

小林永以子

春眠の深き水底より戻る

畠 梅乃

北窓開く羽目をはづせり大統領

北村 文江

草青むよいしよと鴨の上る土手

一ノ瀬茂代

ブレハブの校舎の三年卒業す

出澤 洋子

丹沢の牛の乳垂れ春来たり

岩楯恵津子

世を隈無く愛す陽光チューリップ

大佐田うづき

婆ひとり座して臍の中にある

山田 照子

八重桜宙が重いと思いたり

田畑ヒロ子

大切に空をいたたく白木蓮

小澤 園子

櫟山えくぼのやうに巣箱かな

須田 聡子

三桎の花や有言不実行

瀬戸 正洋

三の丸行きて葉桜静かなる

山本 すみ

きーこきーこにゃあにゃあ自転車が二台

大石 雄介

底ぬけの津軽三味線空苺菜

大石 和子

花便りナビに逆らう裏通り

岡田 典代

豆苗のレシビあれこれシャボン玉

杉山あけみ

蝌蚪の水澱み骨肉相食めり

小島ノブヨシ

紫木蓮べたべた散って靴汚す

杉崎 せつ

青山典仁

逃水を追うてネバダの砂漠に

杉崎せつ

ネバダ砂漠には米国の核実験場がある。そこでは一九五一年から千回近い核実験が行われた。それに対し、核実験中止や平和を求めた抗議運動も何度も行われている。ヒバクシャの多くは「水」を求めながら亡くなられた。戦争無き世界は、追い求めても得られない「逃げ水」のようなものだろうか。

ネバダ砂漠には「エリア51」というUFOの聖地もある。地球の歴史と現状を異星人たちはどう見ているのだろうか。

小澤園子

蝌蚪生れ、ぼ、ぼ、僕らは少年探偵団 小島ノブヨシ

蝌蚪とは古体篆字の称から由来する。中国の上古に、竹簡に漆汁をつけ文字を書き、竹は硬く漆は粘っていておたまじゃくしの形に似ていたからである。オタマジャクシを最近見かけなくなった。中七以下はテレビドラマの主題歌で、懐かしい。オタマジャクシと少年とは同意語。今の子供はスマホゲームの時代、探偵ごっこしない。この殺伐とした世の中でホッとする一句である。

俳句おだわら鑑賞 (令和7年3月号)

城苑俳句・夏の部

(合同句集第十三集 60～74頁より近藤久江抄出)

向日葵の中に星屑吸ひ込まる

忘るるは神の計ひ水中花

夏瘦せなどしてはおれない句は未完

さざえ売り潮の香りも売りにけり

蛭ども放火三昧みたいだなあ

緑裂き洒水の滝の一直線

点となり線となりゆく螢の火

駅近き朝の地下街実梅出づ

飛び習ふ子燕の群れ夕河原

危険です地球沸騰の暑さかな

滝音を胸しとるまで聞きにけり

少年の夢押し上げて柿若葉

カーテンの中の孤独や青嵐

あめんぼうワルツで進むズンタッタ

夕立や灼熱の地が息をする

浜木綿の直立沖に朝来たり

暑さに負けるな山盛野菜食卓に

サン格拉斯己の中の別の人

昭和・平成遊び尽くしてみどりの日

拾ひたる時計動いてゐる夏野

水田を飛び立つ影や夏の鳥

田中 恵一

田中 幸子

田畑ヒロ子

故田 潤 令子

佃 悦夫

出澤 洋子

豊田 幸枝

鳥海 壮六

中田 笑子

中津川 晴江

中根 和子

中根登美子

故 中野 文子

中村 裕子

中村 昌男

中山 智津子

野川 木 一路

陌間 みどり

長谷川 きよ志

畠 梅乃

原 仁子

髪洗ふ明日は良き日になりさうな

生き方は引き算もよし風光る

地球儀に航路をたどり夏惜しむ

夕焼の町の片隅道祖神

ホームラン星が涼しくありにけり

薫風や足でこそげる鍬の土

草といふ字を書いてゐる草いきれ

五月雨や飲み干してしまいたい嘘

古書店のガラスの引き戸夏椿

肥後 ちさこ

廣田 悦子

深澤 一華

二上 光子

二見 和江

古屋 徳男

寶子 山京子

穂坂 志げる

星 一義

●理事の異動…中田笑子(事業部から広報部へ)

高井幸子(一般理事から広報部へ)

秋山 昇・西賀久實(一般理事退任)

◆新会員…湯浅義幸(鹿火屋) 大澤紀子(こよろぎ)

本多登美子(零) 石川州洋・松岡美和子(鷹) 森田

久江・川瀬芳子・鈴木陽子(沈丁) ミステウレット

弘美(春野) 川上靖子(みなみ)

(10名、6年度中入会も含みます)

◆退会…湯本とし子、吉井源太郎、山崎悦子、青山典子、

板谷雅泉、大木敬子、柏木良花、須田晴美、田下昌人、

中根和子、百川秀子、瀧本敦子、秋山昇、尾崎幸子、

神野美代子、柴田礼子、穂坂志げる、蓑宮わか(18名)

加藤健治句集

「足柄路」

加藤かほる（協力豊田幸枝）

この度みなみ俳句協会の加藤健治氏が自分史ともいえる句集「足柄路」を刊行された。氏は長年中学、高校の数学教師として教鞭をとり、更に校長として勤め上げ、その後は南足柄市の教育長を歴任された。

氏の俳句は、教職退職後から始め熱心な勉強を経て今までの経験、更に新しい環境又暮しの中から数えきれないほどの句を詠まれた。

この句集を編む背景には教え子たちの強い勧めがあったという事で、教育と俳句を両立して質朴に生きてこられたしつかりとした足跡のある句集として仕上がっている。正に一生一代記と言える句集なのである。

句集のそれぞれの分野の中から主な句を抜粋。

清雲賞 校長の颯と水打つ参観日

玄雲賞 対峙せる富士と箱根や霧凧

これは所属している結社「玄鳥」時代の入賞句である。校長時代の心配り、自宅から見える風景の描写が詠まれている。

次に四季に区割された章からの主な句を抜粋。

新年 左義長の炎太鼓に囃さるる

春 鳥雲にあす退職の椅子を拭く

余生なおたしなむ詩吟梅白し

梅咲いて村ぢゆうの木が落ちつかず

夏 略図手に家庭訪問町薄暑

疎開児は八十路越えたか新茶汲む

麦秋や書架に手垢の数学書

秋 寸劇の始まりそうな案山子かな

尊徳の捨て苗想ひ豊の秋

星祭子らに教へるピタゴラス

冬 肩書ははずす安らぎ青木の実

ちゃんちゃんこ力むことなき身となりて

いそいそと楯担ぎ出す畑小春

この句集は四百句余りの俳句とエッセイ等で構成され、教師時代と退職後の暮しの中から生まれた句が満載。どの句を見ても平明でありながら言葉を吟味、推敲を重ね格調高い句に仕上げている。日記を読んでいるような、親しみやすい佳句ばかりで氏のいわば集大成の句集。

氏は今年米寿、みなみ俳句では指導的立場でいつでも前向きであり努力家。また、人柄も良く人の輪を大切にする温厚な方である。氏にはいつまでも感性豊かな俳句を詠み続け私達後進の鑑でいて欲しいと願っている。